十　混沌たる農村問題

（大正十三年十一・十二月『改造』掲載）

混沌たる農村問題

＝殊に那須、河田兩教授の農村問題論を讀みて＝

一

農村問題を適當に解釋し、解決し、窮迫の極に在りと謂はるゝ農民と農村とを其の窮狀より救ひ出すに就いて、先づ第一に爲されねばならぬことは、農村問題の本體を徹底的に見究めること是れであらねばならぬ。然るに、我邦現在の農村問題なるものは、私の見る所では、未だ其の本體の所在が十分に見究められて居らぬ頗る混沌たるものである。從つて、我々は農民と農村との救ひ出しを考ふるに先つて、農村問題其のものゝ救ひ出しを考へなければならぬ。何をか農村問題の救ひ出しと云ふ。第一、事實上農村問題の本體を圍繞する所の混沌狀態から、此問題を救ひ出すこと之れである。第二、思想上農村問題

の所在を晦澁ならしめる混沌たる農村問題論者の手から此問題を救ひ出すと之れである。那須教授の『農村問題の歸趨』、(『改造』八月號)河田博士の『農民心理と時代思潮』(『改造』十月號)幷に博士の論文集『農村問題と對策』)とは何れも、此の救ひ出しの企てとして、甚だ有力なものであつて、五里霧中に彷徨する我々と農村問題とに取りて、暗夜の燈火たる可きものである。唯私は不幸にして、以上三論策を逐一精讀した結果、未だ本質上幷に思想上の混沌狀態から救ひ出され得ないものであつて、從つて、三論策によりて農村問題其ものが五里霧中から解脫して、白日を見るに至つたと考ふること能はざるものである。此論文に於いて、私の爲さんと欲する所は、私自ら農村問題の本體を見究めたことを示さんとするのではない。否反對に私はまだ其本體を見究めること能はざる混沌狀態にあるものなることを示さんと欲するものである。私は最善の注意を以て精讀した此等三論策に依つて、殆んど何等の光明をも與へられなかつたことを、卒直に茲に告白して、農村問題の混沌狀態からの救ひ出しの甚だ急務なることを訴へんと欲するに過ぎないのである。但し私は此論文に於いて煩鎖なる學究的の言葉爭ひなどをしようといふ所存は少しも有たない、畏敬する專門學者の博議廣論に對して忌憚なく所感を陳述して、少しでも多く、農村問題の眞正の理解を得るように致したいと念ずるのみである。

二

河田博士は言はれる。農民たるが故に、他の部類の人々とは、多少趣を異にせる心理狀態の認む可きものがある。心理狀態と云ふことが不適當であるならば農民共通の思想又たは思想の傾向の認む可きものがある。(中略)試に之を謂つて見ようならば、先づ農民は一般的に甚だ個人主義的である、又た甚だ傳統主義的である。別の言葉でいへば保守主義である。次に又農民は一般的に宿命觀に捕はれ一種の宿命論者である。同時に又其の生活を處する上に於て甚だ節儉主義者である。そして此等の性狀や思想の傾向が農民一般に共通なるは、主として、實にその與はれる農業といふ業務の性質と、その行ふ農村生活と云ふ生活樣式とより生じ來れるものなることも、睹易き所に屬する、居は心を移すといふが、先祖代々農業といふ單一の業務に從事し、獨り農村の天地に生れるから死

ぬるまで住んで居るのだから、其所に一種の共通なる農民心理の陶冶されるは當然である、その陶冶されたる共通の心理は、農業といふ業務と農村生活との續く限り、萬事流轉の今日に於いても、依然として持續されて行くのである。（中略）

所が右等多くの特色は、その何れを見ても、現代思潮一般とは、とかく十分に反りの合ひ兼ねるものばかりである。中には全く背馳するものもあり、中には傾向としては稍々同一方向に向ひ乍ら、然かもよく十分に合致し併行し難きものがある。そして其事は、農民と農村生活とに取つては、現代に處する上に於て甚だ都合よからぬことである。之が爲めに、農民は農業を捨てゝ都門に走り、農村は荒廢して、今日の所謂農村問題の心理的原因と爲す所となる。（中略）

要するに、農民心理の一大特徴としての個人主義は、同じく個人主義ながら現代一般の個人主義思潮とは、稍々其の立場を異にし、とかく十分に反りの合ひ兼ぬるものたるを謂ふことが出來る。そして其の意味の個人主義心理に捕はれたる農民は、それが爲めに益々現代思潮と現代生活とに於て、其の地位を危くせられ、段々影の薄いものとなりつゝある

を否み難い、農民にして早くこの心理の轉換を圖り、個人主義に立つにしても、人格主義的にして、然かも奮闘的な、同時に又生活と業務との上に於ては、共同一致の力を養ふて以て新なる團體主義を迎ふることを爲さゞるに於ては、農業の衰微と農村生活の沒落とは、所詮免れ難き所たらざるを得ないであらう。農民の抱懷する個人主義甚だ呪ふべきである、排斥す可きである、撲滅す可きである。農民にして飽迄之を固持する限り、時代は之を粉碎せなければ止まぬのであらう。

次に又農民心理の特徴たるその傳統崇拜心や宿命觀的態度やに就いて見るも、何れも今の世には不向なものばかりである、即ち極端な傳統崇拜の如きは、進歩と改良を容るゝ餘地なきものである、農民の有する傳統主義はそれほど極端なものではないにしても、時勢と共に移り行くを妨ぐる點に於て、それは農業々務と農村生活とをして、段々時勢後れのものたらしめると。以上が農民心理と農村の運命とに關する博士の考への筋道である。

三

此れによつて見ると、博士は現代の『農民心理』なるものを、徹頭徹尾否認し、農民離村、農村荒廢の最大原因を、此の『時代思潮と反りの合ひ兼ぬる農民心理』に歸して居られるのである。他の語を以つて云へば、今日の農村問題發生の最大責任者は、此の時代後れなる『心理』てふものを所有する農民其人であると云はれるのである。私は博士の此の考察の仕方には、實に耐へ難いほどの混亂と不透徹性とが含まれて居るものと感ずる。今少しく順序を立てゝ少し私の解し得た所を述べて見よう。

第一に、博士が日本の農民を以て個人主義心理に捕はれて居るとの斷案を下されたのに對し、私は喫驚を禁じ得ないものである。私共の見る所では、日本の農民位非個人主義的なものは類例少いと云はなければならない。日本農民の間には個人と云ふ思想は極めて弱いものであり、其の個人性の發達は非常に遲れて居るものと思ふ。然るに依つて又た社會と云ふ觀念、社會思想は極めて幼稚なのである。言ふまでもなく、社會と云ふ觀念の發達は、個人と云ふ觀念の發達と其の度合を同くするものである、構成要素たる個人性の覺醒するにあらざれば、構成體たる社會性の自覺は起り得ないのである。若しも博士の言はるゝ所の意味が、日本農民間に社會觀念幼稚なりと云ふにあらば、其は誠によく正鵠を得たものである。然し若し博士にして、其事を言表すに、個人主義的てふ言葉を以てせらるゝものならば、其は問題の紛糾否顚倒と云はなければならない。博士も此點に考慮せられたか否か、後段に於いて、農民の個人主義と一般の（卽ち正しく言ひ表はされたる）個人主義と決して同じからざることを繰返し言つて居られる。乍去、是れは自殺的論證ではあるまいか。正しく解せられた個人主義觀と、日本の農民の『心理』又は思想の基調（グルンドトーン）とは全然反對なものである。然るを博士は、兩者を以て共に個人主義の細目（アアアルト）なりとして居られる。是れは、單に言表はし方の問題ではない、抑も『心理』なるものに關する根本的見方の相違の問題であると信ずる。

四

F. VI, 145.

博士は或は Bäuerliche Pfiffigkeit（百姓の頑固性）Bäuerlicher Egoismus（百姓の利己心）のことを個人主義てふ全く異れる内容を有する語にて言表はして居られるものではないか。若し萬一然るならば、其れは驚く可き概念の錯誤に陷られたものと云はねばならぬ。頑固性とか、利己心とか云ふ性狀の傾向と、個人主義と云ふ一の人世觀とは、如何なる場合にも決して混同す可きものではないのである。然し私は日本の農民を以て特に頑固性や利己心に富めるものと考ふることを得ないものである。否日本の農民は農民として頑固性や利己心に富まざることは、之を歐州大陸の農民に對比して、甚だ顯著なりと觀察しつゝあるものである。而して其れがやがて日本に於いて早く農民解放運動の起らず、小作爭議の起らず、日本の農民は永く『死なず、生きざる樣に』壓へつけられて其運命に默從して居た最大の原因であると思ふものである。博士は、又此の現象を解して、日本の農民は宿命論者なりとせられる。此れも亦私が理解することを難んずる點である。日本の農民が堪へ難き壓迫に永く堪へ忍んで居たのは、彼等が一種の宿命觀に囚はれた宿命論者であつた爲めと見るのは、同情に缺け理解に缺けること大なる見方ではあるまいか。

彼等は西洋の農民の如き Pfiffigkeit を有せず、素直な人間であつたが爲めに、堪へ難きを堪へ忍んで百姓一揆を起すこと極めて稀（西洋に比すれば、殆んど皆無と云つても差支ないほどに）であつたので、彼等は決して宿命論の人世觀に立つて、此の宿命を甘受して居たものとは思はれないのである。博士の云はるゝ節儉主義者たりしてふ事も亦同樣であらうと思ふ。日本農民は別に節儉主義などと云ふ倫理觀上の一主義を奉じて居たものとは思はれない。彼等が節儉なりしは、然するより外に生く可き道が存しなかつたからである。『死なず生きざる樣に』と仕向けられたる彼等としては、極端なる節儉によつて死せず、さりとて大いに生きもせず、辛ふじて其露の命をつなぐの外はなかつたのである。此等の『心理』なるものが、農民に累したのは、寧ろ昔しにある。此『心理』あるが爲めに、日本農民は永く解放し得られなかつたのである。而も其れは、彼等が責に任ず可き惡癖でなく、却つて、彼等の人間としての尊さを示すものである。其尊さを利用し、それに附け込んで、彼等を永く壓迫した江戸幕府時代の武士諸侯こそ憎みても猶餘りあるものなのである。然るに河田博士は、日本農民の此の『心理』なるものを以て、農村荒廢、農民離

村の責任者として、之を非難す可く彼の一文を公にせられた。博士は果して日本農民の眞の理解者を以て目せらる可きであらうか、私は多少の疑を抱くことを禁じ得ないのである。

五

然らば、過去に於いては、其人間性の尊さを成して居つた此の柔順性は、今日の時勢に於いて、農村問題を惹き起した原因と見る可きであらうか。換言すれば、河田博士の見方は、過去に就ては妥當ならずとするも、現在に於いては轉じて妥當性を生じ來つたものと見る可きであらうかと云ふに、私は斷じて左樣ではあるまい、否寧ろ其反對の見方こそ妥當性をより多く有するものであらうと思ふ。言葉を換へて言へば、今日農村問題の叫び聲の喧しくなつたのは、博士が日本農民の心理若くは思想傾向として指摘せられたものゝ存在するより起つたのではなく、寧ろ其反對に、其の『心理』其の思想傾向が段々消滅し行くが爲めに、今日の農村問題は起つたものと見る方が當を得ては居らぬかと、私は觀察するものである。博士の言を藉りて云へば、一般の現代心理、思想傾向と兎角『反りが合はない』が爲めに、農村問題が發生したるにあらず、却つて其反對に、農村の民も、漸次に現代の心理、一般の思潮と『反りが合ふ』ようになり始めたが爲めに、農村問題は發生したので、あつて、博士の見方は、冠履顚倒、トプシー・ターヴヰーと云はなければならないようである。從つて若し、農村荒廢、農民離村の責任が、農民の側にありとするなれば――私は之を否認するものである――其れは、博士指摘の『心理』の存在の上にでなく、却つて其の漸次的消滅の上にこそ求めらる可き責任であるのである。而して此の心理の消滅を促したものは、農民自身でなく、農民以外、農村以外の所謂現代――即ち資本主義營利經濟の現代――であることは、誰人も疑を容れない所であらうから、消滅の責任を彼等農民に歸しようとするのは、飛んでもない履き違ひとなる。責任者ありとすれば、其れは農民以外、農村以外の天地に尋ねられなければならない。即ち言葉を換へて云へば、私は農村問題發生の原因を農村の中に求めようとする一切の農村問題論を以つて無理解の甚しいものと見る。農村問題發生原因の所在地は遠く農村以外にあり、其責任者は、全然農民を離れたる以外

の社會にあると信ずるものである。河田博士が農民に早く此の心理の轉換を圖れと命ぜられる其事は博士の命令を待つまでもなく既に已に起りつゝあるのである。其れが起りつゝあればこそ農村問題は喧しく叫ばれるに到つたのである。博士が農村問題消滅の適藥として處方を盛れた所のものは實は却つて其の勢を助長せしむ可き最有力の動力たるものであると云はなければならぬ。

六

讀者は以上の言によつて、私が農村問題を見る見方は其態度に於いてのみならず、根本的立場に於いて、河田博士の其れとは相反せるものなるを諒とせられたことゝ思ふ。即ち私は農村問題の發生を一の忌はしいこと、悲しむ可きこと、希はしからざることゝ見るような立場に立つて居らないのである。元より其樣な問題の起る餘地が全く存在せず、日本の農民が生活の安定を得、人としての生存を十分に樂しみつゝあるものならば、其れが理想的狀態と云ふ可きは勿論である。それに反して生活の安定なく人としての生存の脅かされて居ることが事實なる以上は、一日も早く、而して一聲と雖も多く、農村問題の起り叫ばれることは、其れが發生せず、其れが叫ばれざる昔よりは遙かに勝つた現象なりと私は信ずるものである。病なく痛も亦なきは最上である。然し病あるに痛なくして病者其病に心付かざるは危險此の上ないことである。私は日本農民の現狀にして持續する限り、農村問題の彌々益々高く叫ばれることを歡迎する外なしとするものである。而して問題の發生が博士の指摘せられた農民心理なるものが、漸次消滅し行く處より起つたものとするならば、其の消滅こそ寧ろ喜ばる可き現象と云はねばならぬ。神戸正雄博士は嘗て日本農民は可成自足經濟に甘ぜざる可からず、即ち其食ふ所の醬油を自ら作り下駄を自ら作るようにし、都會の產物たる毛布や洋傘を購ふことを罷めねばならぬと主張された。私は博士に反問した、何故農民のみ自足的でなければならぬか、農民が下駄や醬油を自ら作らねばならず、反對に大學教授は舶來のソースや靴を三越でドシ〳〵買入れて差支ないとは、抑も如何なる經濟理論によりて要求せらる可き處なるかと。河田博士の論、神戸博士の論共に兄たり難く弟たり難き農民差別特殊觀の見地を示めすもの

ではあるまいかと思ふ。更らに又た河田博士は農民離村を以て大なる疲弊として居られる。他方に、日本今日の農村の疲弊を農村人口の過多に歸しブラジル移民を主張せらるゝ論者は那須教授である。離村することなくして、遠く南米ブラジルに移住し得る妙案は、私は考へ及ぶこと能はざるものである。農村人口が過多なることが、農村疲弊の原因なりと聲高く叫ぶ論者よりも、默々として自ら離村して幾分にても過多なる人口の緩和を實行しつゝある農民こそ、より忠實なる農村問題解決の實行者であるのではないか（但し私は流行の移民論を一の謬見なりと信ずること後段述ぶるが如くである）。今の農村論の晦澁混亂を示めす好適例として、私は此一事を指摘して置かなければならないと思ふ。而して此の混沌はやがて現時の農村論を最もよく特徴付けて居るものゝように思ふ。

七

那須教授は其論文の始めに於て、『農村問題の特異性』として『農村問題の內容の斯く複雜豐富なることが偶々人をして農村問題の本體何處にありやと惑を抱かしむる所以となるのである』と言つて居られる。此事は那須教授も引例せられた如く、先年の社會政策學會大會に於て、私は高野博士と共に横井時敬博士に對して繰返し指摘した處であるが、爾來數年農村問題に關する論議甚だ盛となつた今日に至り、更らに新人たる那須教授の該博なる論を得ても、一向緩和せられて居ることを見出さないのは遺憾極りなき事である。農村問題の內容が複雜なることは事實である。否定す可からざる事實である。故に他の多くの問題に勝りて農村問題こそは、理路井然たる透徹した考察を最も急要とするのである。單純なる問題に向ふには、左迄の用意を須ゐず素朴なる常識論を以てしても差支あるまいが問題が複雜なればなるほど、十分に用意せられ、訓錬せられ、研ぎすまされたる鋭き觀察を以てすることが必要である。今日の農村問題の混沌たる原因の大半は問題其ものゝ複雜なることは疑を容れない處であるけれども他の一半は其の觀察者の混沌、其の立論の不透徹に存するものではあるまいかと思ふ。而して那須教授の農村問題複雜性論は問題の複雜性を示めすのみならず、其の觀察の複雜性を最も有

力に示唆するものゝように思ふ。

那須教授は云ふ、農村問題に於ては、一國全體又は都會に就きて論じたる時に別々となせる問題を、往々一括して相聯絡せるものとして論ずるが爲めに、其れは複雜となるのである。然らば左樣に一括して論ずるは何故であるか、其れには下の如き理由ありと思ふとして六箇條をあげて居られる。

一、農村住民の大多數は略同一なる環境の下に同一なる職業に從事して居ること

二、其の結果として、農村民は其の心理に於て共通點多く、經濟的、社會的、文明的生活及要求に於いて、略同一なること

三、農業は尙生業の域を全然脫して居らぬために、多くの市民にありては營利生活と家庭生活とを判然區別し得るに反し、農業者にありては、其の經濟的活動と家庭的、社交的生活とが不可分の關係に存すること

四、農村に於ては、文明生活の各要素間の有機的結合著しきが故に、一の要素に就きて、改良を圖る爲めには、同時に他の要素に對しても變更を加ふる必要があること

五、農村に於ては、人間及び職業の移動、事情の變遷が都會地に於ける如く急激ならざるが故に、各種要素間の相關關係を研究するに便宜多きこと

六、農村の對外的問題、例へば都鄙公租負擔の配分、農產物保護關稅、農產物價格調節、國民食糧自治等の問題と、農村の對內的問題、例へば、農業組織の變革、農家經濟改善等の問題とは之を切り離して考ふるを得ざること

八

教授は云ふ、『以上の如き事情存する爲めに、農村問題は自ら複雜なる內容を有するに至るのである。（中略）斯くの如き經營上の問題は工業及商業にも均しく存することではあるが、農業に於ては、其の作業の種類が商工に比して遙かに複雜であるから、研究す可き事項も頗る多端となるのである。これ農業經營學なるものが學的存在を要求する基礎である』と。私は此一節を讀んで殆んど私の眼を疑はざるを得なかつた。何となれば、農業の經營が商工業の經營に比して遙かに複雜なりと云ふことを自明の事理の如く、

博士は我々に默認を命ぜられ、而して更らに內容が複雜だから農業經營學が學的存在を要求する基礎があるてふ、學問方法論上前代未聞の哲理を我々に强制せらるゝからである。考察す可き事項が頗る多端だから學的存在要求に基礎ありとして農業經營學が主張せられるなら、其れは學としては自殺的主張と云ふの外はない。何となれば、其樣なる理由を以て其の存在を要求するといふ事其事が、學的存在を自ら否認する最も有力の基本となるは疑ないことであるから。博士は、農業にのみ經營學の存在を主張し、商工業にも經營學あることを毫も知らざるにや、考究事項の多端なりてふことが存在の理由ならば、商工經營學は農業經營學よりも、更らに遙かに多く存在の理由を有つであらう。其は兎に角、農業が商工業より作業の種類が複雜なりとは、餘りに現代離れのし過ぎた觀察ではあるまいか。博士は農業經營學に精通せらるゝ他方に商工業の實狀に就ては嘗て一顧をもせられたことなしと見へる。何となれば、然るにあらざれば、此くの如き暴言は到底發し得らる可きではないからである。否暴言と云ふは寧ろ當らず、私は直下に其を謬論と呼んで決して不遜の罪を冒すものでないと信ずるものである。教授が農業經營を以て商工業の比し得可からざる複雜なるものなりとして列擧せられた七ケ條の何れを取りて見るも、其れ以上、若くは少くとも、其れと同程度の複雜な內容は、商業經營にも工業經營にも存するのである。即ち一耕地一帶の面積狹少且不規則なるが爲めに耕地整理の必要があると云ふことに對しては、工業には、經營範圍の問題があり、又た『シュタンドオルト』の問題がある（從つて『シュタンドオルトレーレ』と云ふ一科の構成を主張する學者がある）二轉業又は移住の問題は、工業勞働者に取りての大問題である　三組合の問題、工業にも商業にも同樣の問題がある　四厩肥不足の問題、此くの如きものを數へ上ぐるとなれば、工業上には僕を更ふも盡きぬほどある。商業も亦然り。五勞力過不足の問題、之れは農業の問題としてよりも工業の問題として重大なることは誰人も皆知る。六農業信用の問題、商業信用の問題はそれより數倍重要の問題である　七農業者の機械的知識、工業勞働者に要せらるゝ、其れと執れが重きか等、教授の列擧は、却つて農業の經營は、商工業の經營に於けるよりも、問題の內容單純なることをこそ示せ、其の複雜なることを立證する力は些も之を有たぬように考へられる。

九

更らに遡つて教授の前段の六ケ條を見るに其の大多數は、現今の農村問題に特有なものではない、何れも幾百年の昔から、我邦の農村に存して居たものである。即ち　一我農民は遠い昔から同一の仕事に從事して居た　二其の經濟的、社會的、文明的地位及要求に於いて略同一であつた、否今日よりも更らにより多く同一であつた　三經濟的活動と家庭的、社交的生活とが不可分の關係にあつた　四文明生活間の各要素間の有機的結合が著しかつた　五人間及職業の移動事情の變遷が都會に於ける如く急激ならず、各種要素間の相關關係は密接であつた。而して其密接さは今日よりも遙かに大であつたのである。然るにも拘らず、農村問題といふものは毫も存在して居なかつたではないか？！

農村問題の複雜なることを、右等の事情が存するのを以て說明しようとするのは、歷史を全然無視し、社會發展の行程を全く度外に措くものでなくて何であらう。

十

教授の指摘せられた所は農村問題其ものゝ複雜性ではない。現今に於ける所謂農村問題論者の取扱方の複雜性である。右列擧の諸事項を別々に引離して考究すること、都市に於ける諸々の問題に於ける如くするならば、此の複雜性なるものは雲散霧消するであらう。取扱者の頭腦錯綜して理義の明晰を缺くが爲めに、其取扱方が支離滅裂となり、從つて右の如き複雜性が起つたのである。此事は横井時敬博士に對する抗議に於いて私は縷說して置いたことは、那須教授今猶記憶せられるであらう。問題が混沌たるにあらず、問題者の腦裡が混沌紛糾して居るのである。問題若し靈あらば、必ず其不遇を慨歎するであらう、殊に勞働問題の好遇を健羨に堪へないであらう。教授の列擧せられた一二項は問題其ものから見れば、複雜性の證據たらず却つて其の單純性の左券とならざるを得ないのである。農民の大多數が略同一の環境の下に同一なる職業を營んで居ることは、問題の共通性と其單一性を條件付こそすれ決して其の複雜性を示めすものではな

い。又農民の心理に共通の點多く、經濟的、社會的、文明的生活及要求に於いて略同一なることは、同じく其間に起る問題をして單一性を帶びること甚大ならしめるもので、決して之を複雜ならしめるものではない。教授或は答へて云はれるであらう、然り汝の言の如し、然れども予は六ケ條の一々を以て農村問題の複雜性を證明せんとするにあらず、六ケ條集積して一の農村問題を成すが故に複雜性を生ずと證明せんとするものであると。果して然れば其れは全然取扱方の事項である。如何に單純な問題たりとも、一定の方針なく、一貫の理路に依らず、唯だ思ひ付いた儘ゴタ〳〵と並で立つるときは、複雜なるものとなることは勿論のことである。農村問題の本質が左樣なるゴタ〳〵的取扱を要求するとせば、其の問題の複雜性を裏書することとならう。本質が之を要求するに非ず、唯だ問題取扱者が、精神的怠惰性の常習者にして、其々の性質に從つて問題の分類と其特殊的取扱を爲すことを怠つて、雜然と思ひ浮ぶる儘に問題を混淆する物臭太郎たるが爲に、此の複雜性が生じたのではあるまいか。然れば農村問題を解決せんとの善意ありて、却つて其の紛糾を助長するものと云はなければならない。都市に起る凡百の問題を若しも右と同樣なる物臭的取扱を爲すとせよ、其の複雜性は到底今日の農村問題の其れと同一の談でないに相違ない。唯都市諸問題の取扱者は幸にして物臭太郎にあらず、即興的常識論者に非ず、各般の問題に對して一々特殊的に適當なる取扱と處理とを爲せばこそ、農村問題を今日累しつゝある複雜性を免れ得て居るのである。責は農村問題其ものには毫末も存せぬ、唯其の怠惰なる取扱者にのみあるのである。

十一

論じて茲に來り、私は批評の筆を姑く休めて私自らの複雜性理由觀を一言して置く必要があると思ふ。農村問題は複雜である確かに複雜である。其取扱者を入れ換へて有爲有能なる人の手に任かすとも、其複雜性は容易に取去ることを得るものでない。其然る所以は、那須教授の指摘せられた取扱上にあるのではない、抑も問題の本質其ものに存すると言はなければならぬと思ふ。

今日の經濟社會は資本主義組織を其基調とするものである。農村問題は資本主義の

F, VI, 146,

發遂に促かされて起つた問題である。農村問題は農村から起つたのではない。社會から、――資本主義の支配の下に立つ營利社會から――起つたのである。恰かも勞働問題は勞働其ものから起つたのでなく、資本主義社會から、殊に資本の側から、資本的企業者の側から醸し出された如くに。若しも經濟生活の資本主義化が全く起らず、又はよし起つても今日の如く顯著でないならば、那須教授の列擧せられ若くは未だ列擧するに及ばれざりし幾多の事實が存するとも、所謂農村問題は決して起らないに相違ない――他の形で色々の問題は起るであらうが、其れは今日の所謂問題では決してない――故に我々は、農村問題の成立と其の本體其の本質とを農村に求める限り決して之を見究めることを得る望なきものである。此れを見究めんとするには、我々は其の醸出の本場に於いて探索せなければならない。農村問題が那須教授の言はれた樣に一の特異性を有つことは確かなる事實である、現前の事實である。我々は此の特異性の解釋を農村の間に求めても到底之を得ることは出來ない。其は、其の適當の場所に就いて探求せられなければならない、適當の場所とは現代の資本主義經濟組織に立つ社會是である、我々は其の解釋を此中に求めなければならぬのである。而して私は農村問題の特異性としての其の複雜性は、之れを資本主義社會に於ける一の消極的事實と見て始めて、其の本質を究めることが出來るものであると考へつゝあるものである。

十二

今日の資本主義社會は、其態樣の複雜にして其行程の多趣多端なることは、到底農村に於けるの比ではない。然るに農村問題は却つて複雜性を其の特異性とする。是れは一見逆理であるかのやうに見えるが實は逆理でないのみならず、却つて事理の當然を物語るものである。何故に然るか。

資本主義社會は實に形容し能はざる程複雜なものである。而して資本主義の擔荷體たる商業、工業は其の本質に於いても、其經營に於いても非常に複雜なものであつて、到底農業の得て比し得可からざるものである。然るに其態樣は如何に複雜に、其經營上の問題は如何に多岐に亘るとも、其等は資本主義によつて一貫的に又た徹

底的に支配せられてゐるものである。資本主義は從來人間の經濟社會を支配した何れの主義よりも遙に勝りて有力强大な主義である。其支配は絶對的とも云ふべき程徹底したものである。其作用は如何なる專制君主も企て及ばざる底の强大なものである。殊に資本主義の獨壇場たる市場と云ふものゝ發達すればする程、其支配は全排他的獨占的となる。營利經濟の主體は云ふ迄もなく、營利圈外に在る經濟主體たりとも、今日の社會に於いて生を營むには必ず此の市場に藉らなければならない、一切の工業の生産は市場生産である。一切の商取引は市場取引である。一切の勞働は市場勞働である。否少くとも都會住民の消費は市場消費たるの色を濃くしつゝあるのである。藝術も政治も法律も漸次市場藝術市場政治たらんとしつゝある。かくて我々の生活の大部分は市場に關はらずしては維持せられないようになつた。市場は暴君である、單なる接觸を許さない、一度茲に出入し一指たりともこれに觸るゝものは、これを對等關係に置くことを許さない、市場は其觸るゝ一切のもの、其接する凡べての物に對して支配者命令者となるにあらざれば滿まないものである。即ち我々は市場に依係する限り其の被支配者其の命令執行者となるの外はないのである。市場の被支配者は即ち資本主義の被支配者である。而して然る限り、我々は極めて徹底的にして一貫的なる一の原則によつて支配せられ、之れに依りて我々の複雜多趣なる生活態樣を整然と統一化せられるのである。資本主義の特徴は營利主義である。餘剩價値の追求と其集積とを最高命令者の祭壇に祀るものである。此の營利主義此の餘剩價値追求は更らに極めて嚴格なる合則性 Gesetzmässigkeit 合理性 Rationalität を其基調とするものである。從つて營利主義に支配せらるる限り、餘剩價値追求に依係する限りの人間の經濟的社會的存在と其の行爲とは、嚴格に一貫せる此の合則性、合理性の下に立ち、此れに依りて其の生活態樣の複雜其の生活運營の多趣性を一律化せられ、統一化せられるものである。此の認識なくしては、現代の資本主義經濟生活の眞相は之を捕捉することは出來ない。殊に我々の經濟生活の基調を理解することは全く不可能である。

然るに今日の所謂農村生活は、此の資本主義の支配を受くること餘り無きか、若しくは輕微のものである。殊に我邦農民の大多數は市場への接觸からは未だ甚だ遠い地位に

在るものである。從つて營利主義の一貫的合則性、合理性の支配を受くること全くないか、あつても極めて微弱たるに過ぎないのである。從つて農村と農民の生活態樣と其經濟行爲とは有るが儘にの素朴に任かされてあつて、營利主義によりて其態度を整理單一化せられ、生活行動を統一化せられること殆んど若くは全く之れなきものである。此の農村に、此の農民の間に起る問題たる農村問題は從つて合則的に、合理的に單一化せられ統一化せられ、一の嚮導的主義の下に整理せられることなき素朴其の儘のものである。今日現在の農村問題の複雜性は此事情から起つて來て居るのである。問題其のものの複雜性が他の問題より大なるのでない、問題の依つて起る農民農村生活其ものが未だ資本主義の洗禮を受け合理化、合則化の聖別を受けざる生れながらのものであるからなのである。

十三

資本主義營利主義が之れを支配する經濟生活の態樣に統一性を與へ、之を合則化し合理化する道は唯一つしかない、其れは今日の流通市場の支配是れである。流通市場は無差別の法則（又は一物一價の法則 Law of indifference）の行はるゝ舞臺である。市場に出入し、其の支配の下に立つ需要者と供給者は、非常に複雜な差別的法則の下に立つて居るものである（之を Law of varying costs; Law of varying utilities 差別的費用の法則、差別的利用の法則と名けて置く。詳くは、近刊拙著『流通經濟講話』を見られたし）。然るに彼等が一度市場の魔術に懸ると其差別性は頓に消へ失せて、一樣に無差別の法則によつて支配せられることとなるのである。從つて市場に於ける、又並びに市場の支配を直接か間接かに被むつて居る諸々の取引は、皆マルクスの所謂『等價形式』（エクヰヴアレント・フオルム）によつて、劃一せられ、統一せられるのである。等價形式によつて劃一せられつゝ、其れ〴〵は非常に複雜な差別則の下に立つが故に、需要者も供給者も其れ〴〵に異なる餘剩を收得するのである。限界需要者と限界供給者とは限界的平均餘剩を收得するに止るけれども、爾餘の需要者と供給者とは、限界餘剩以上に其れ〴〵に異なる割合に於ける需要者餘剩が供給者餘剩かを收得するもので、而して其の餘剩の收得と云ふことが、

今日の營利流通經濟の根本動力たり、又目的原因となつて居るのである。其れは市場が無差別の法則によつて、一切の市場取引に劃一性を與ふることによつて、之を普遍化し、又た合理化すると云ふことを前提として居るものであつて、此の前提なくば、餘剰收得の經濟生活卽ち資本主義的營利經濟は成立し能はぬのである。故に今日現在の經濟生活に合則性を與へ合理性を與へて之を統一するものは、市場を措いて外にないと斷言して差支ないのである。

十四

此の合理化は、あらゆる不合理的要素を淘汰し抽象し去るのである。詳しく云へば、經濟生活を支配し影響する他の諸々の要素は、此の絕大なる市場の合理化によつて、全く其の力を奪はれて仕舞ふのである。かくて經濟生活の普遍性が、他の何れの時代にも見ること能はざる程度に打ち建てられるのである。リツカートは其の『文化科學と自然科學』第二版一一七頁に於て『文化科學の中經濟生活を研究の對象とするもの（卽ち經濟學）に於ては普遍的概念は最も廣く用られるであらう。何となれば、文化生活の中特に經濟的運動の分別せられ得る限り何れも大數に關するものなる可く、從つて經濟學てふ文化科學の本體は、最も多く比較的に普遍的なる概念の內容と一致す可きであるから。例へば一定の國、一定の時代に於ける農民又は工場勞働者の歷史的性質は、凡て他の同種のものに共通のものである可く、從つて自然科學的に、其概念　形成し得可きで、純個別的特性は顯はれず、一般的概念的事情の設定最も廣く行はれ得るであらう』と云つて居る。此一節に對しては、リツカート崇拜者の中にも異論はあるようである。私も亦農民と工場勞働者とを一律に見ることには、斷じて與みし得ないものであり、又其の理由の說明にも服し難いのであるが、右の言を市場支配の下に於ける經濟主體殊に營利的餘剰收得行爲に限りて適用することには、全然贊同するものである。今日の營利行爲に、而して營利行爲の經濟學に其の普遍性（リツカートの語によれば自然科學的性質）を附與するものは、歷史的性質の共通よりも、寧ろ遙かに多く其の市場性であり、其の市場被支配性であるのである。

經濟主體殊に自然人經濟主體は、決して單に經濟的動機によつてのみ活動するものではない、況んや營利的動機のみによつて活動するものではない。彼等は國家的政治的家族的宗教的其他幾多の動機によつて動かされるものである。然るにも拘らず、彼等が一度市場のスペル（魔術）の下に立つや、此等の特殊的個別的にして甚だしく差別的なる諸々の事情は、全く淘汰し去られて、其處に殘るものは、唯だ餘剰獲得の一動機のみとなるのである。從つて凡ての市場被支配者は、殆んど普遍的に非個別的に統一せられ、劃一せられるのである。此事は私が今更事珍らしく論ずるまでもなく、一度でもゾムバルトの諸書に目を通した人には、自明の理と云つて宜しい位になつて居るであらうし、殊にマルクスを若干知つて居る人には、釋迦に說法であらう。市場による此の劃一化がなくなるか、又は其れが微弱となるときは、商工業を影響する諸々の事情は七つを七倍したる惡鬼の如く押し寄せて來るのである。

十五

農村問題の複雜性は右の原則から消極的に說明せられるのである。今日の農村の經濟は七つを七倍したる惡鬼の纏綿する處なのである。農民の經濟はリツカートの言ふ所とは反對に之を普遍化し、非個別化す可き一貫の原則を有たぬものである。從つて統一的の經濟的動機のみによつて支配せられず、常に他の複雜なる諸事情の影響を被つて居るのである。其原因は唯一つ、卽ち農村農民の經濟は市場の支配を受くること皆無なるか、若くは極めて稀薄なものであること是れである。

然るに、那須教授は云はれる、『かくの如く都會生活に於ては確認することの甚だ困難なる因果關係の糸が、農村生活に於ては明かに認識せられ、而して其糸は經濟、社交、教育、家庭等の各部門を貫いて居る。農村問題の複雜化は此所に發生する』と。先づ私に言葉咎めと誤解されそうな一言を許されたい、教授は農村問題の複雜化と云はれる、乍去農村問題は決して複雜化したものではない、初めから複雜性を有して居るものである。複雜化と云へば複雜ならざりしものが、複雜になつたことを意味する。然るに農村問題は其起る當初から複雜なものであつて、決して後から複雜に化したるものではない。此れは

決して單なる言葉の問題ではない。農村問題の複雜性其ものに關する見方の根本的差違の問題である。教授は都會生活では、確認することの甚だ困難な因果關係の糸が、農村生活では明かに認識せられると云はれる。之を他の言葉に引直すと、教授は自家矛盾のことを言つて居られることになる。何故ならば、教授は、前には農業の經營は商工業の其れよりも遙かに複雜であると斷言せられて居るのに、此一段では、都會生活は因果關係の糸が確認されないほど複雜な事情を有するに反し、農村生活に於ては其れが明かに認識せられる、即ち其れ程單純だと斷定して居られるからである。私は教授の眞に言はんとせらるゝ處が那邊にあるかを知るに惑ふなきを得ないものである。

十六

若しも因果關係の糸が明かに確認せられ得るならば、其は複雜化又は複雜性を證明するよりも、寧ろ其の單純性を證明すると云つた方が理路は徹底する。乍去、事實は其反對なるを如何せん。市場によつて統一化合則化せられざる農村の生活は經濟以外の社交、教育、家庭其他の原因事情が相錯綜して已がじじ其作用を逞しつゝあるから複雜なのであつて、其間の因果關係の糸は決して明かに確認せられ得ないのである。何となれば、市場によつて、資本主義によつて、普遍化せられない他の諸々の事情なるものは、一貫的合則性を有せず、偶發的個別的又はリツカートの所謂一回限り的のものであつて、其作用は實に千差萬別なものである。因果關係の糸は明かに確認せられるどころか、其存在さへ殆んど之を認むることが出來ないのである。無いものは確認せられる見込は到底ないのである。殊に傳統、習慣、惰性に基く事情は極めて不合理的にして、又た非合則的なものである。而して、其れは均しく農村と云つても、農村毎に決して同樣なるものではない。殊に我邦の東北地方と西南地方、關東地方と關西地方とでは非常に徑庭のあるものである。市場の支配を受くる限り、商工業には其樣な差別性はないのである。各地方の特殊なる商習慣は段々資本主義の洗禮を受けて、今や全國劃一的に近きつゝあるのである。他方に於て小作爭議の起否、其の數、其激しさが、地方によつて甚だ異なるのを見て此理は直ぐ理解せらるる可きである。又他面に我邦農慣習の千差萬別なることは、小野武夫氏の續々

發表せられつゝある各地の慣行調査を見ても、明瞭一點の疑を容れざる所であらう。舊幕時代の各藩は、其れ〴〵に甚だ異つた對農民政策を取つて居て、其れが今日まで影響を及ぼして居ることは、私の言ふを要せない所であらう。而して其れは獨り我邦に限られたことではなく、歐洲諸國何れも皆然りである。因果關係の糸の最も明かに認識せられ得るのは、農村に於てでない、却つて都會生活に於てである。何となれば經濟生活を影響する諸般の事情は、都會生活に於ては、皆市場の大魔力に逢着し、其の爲めに悉く一貫永續の統一的のものに合則化せられ普遍化せられ、制約せられるからである。

十七

尤も今日の農村農民が市場に出入する場合は尠からずある。乍去、此場合でも、其の市場の支配を受くることは寧ろ微弱である。其原因は種々あるが、重なるものは、近世の資本主義的生産の特徴たる集中化と大經營とは、農業に取つては、工業及商業に於けるとは、同樣の作用を有するものでないからである。工業に於ては、集中化は其の生産能率を高めることは疑のない處である。然るに農業に於ては、必ずしも然りと云ふことは出來ない。從つて集中化せざる農家經濟も、猶集中化した農家經濟と對等に競爭し得る。否集中化せざる農家は、市場に賣出すものを有すること少く、而して其少きものを賣ることは、却つて多くのものを賣るよりも容易な場合が多い。工業に於いては、其反對に集中化すること少き經營は、到底集中化の高度なる經營と對等に競爭することは出來ない。早晩其の爲めに倒されることを覺悟しなくてはならぬ。かく集中化が工業生産の生命たり特徴たる所以は、工業の生産は集中化することによつて、收穫遞增の法則の惠みを受くることが出來る。其反對に集中化せざる工業は其の惠みを受くること全く不可能なるか、若くは甚だ尠いからである。然るに農業に於いては、收穫遞減の法則は偉大なる力を以て支配しつゝあつて、集中化によつても之れを免るゝことは非常に困難であり、況んや遞增法則の惠みを受くることは甚だ六ケ敷いからである。殊に工業に於ては、經營を大にするときは、遞增法則の惠みを受くること甚だ大であつて、從つて其の生産能率は集中化の度合よりも更らにより多く增進する場合が多いのである。農業に於いては、寧ろ其反

對に過小農を除いては、經營の小なるものと雖も、其生產能率は毫も經營の大なるものに讓らないものが甚だ多いのである。殊に自作農に於いて然ることは私の吸々を要せざることであらう。更らに、工業に於ては集中化は經營の大なるほど之を行ひ易いのであつて、此兩者は殆んど正比例を以て增進するのであるが、農業に於いては決して然らず、經營小にして集中化の度を高くすることも出來るし、經營大なるものにして甚だ粗放的に營まれて居るものもあるのである。此一事丈けでも農業經濟に複雜性を帶びしめる。何となれば、此等事情の相互作用は甚區々であつて、之を一貫的に因果的に說明することは殆んど不可能であるからである。商工業に於いては經營の大小は、集中化の多少と相伴ひ而して又た收穫遞增、生產費遞減の法則の作用を一貫的に規則正しく被むるが故に、其の因果關係は、容易に且つ明かに認識せられ得るのである。那須教授の因果關係論は、全く冠履を顚倒した見方ではあるまいかと疑はざるを得ぬ。かくては複雜なる農村問題を出來る丈け單純化して考察しようとすることを、全く斷念せしむるの外はないことになるであらう。農村問題は複雜である乍去現今我邦現在の農村問題論は更らにより複雜なものであると云はねばならぬ。

十八

ロドベルトスは、一八六七年に『土地所有の現在の信用缺乏の說明と其救濟』と題する有名の書に於いて、農耕地を資本として取扱ふことを極力攻擊したことは、人の知る所である。彼曰く今日の法制は、土地の所有を資本として取扱ふてゐ根本的誤謬に陷つて居る。然れども土地は決して資本たる可きものではない。何となれば、資本とは一の產物の謂であつて、其の價値は其の生產に費された生產費に基いて計算せらるゝものである。土地は決して生產物ではない、從つて其價値は、決して生產費によつて計算せらる可きものではない。土地は唯一の收益源泉である、一の賃子基本である。故に土地を目的とする一切の法律行爲は、土地所有より生ずる收益率（賃子率）の賣買又は抵當のみに關す可きである。然るに今日は左樣はされて居ない。今日の法制は、土地所有に人爲的な資格を强制し、土地の生ずる純收益を現行利子率を以て還元し、かくして得られたる額を

F. VI, 147.

土地所有の資本價値として取扱つて居るのである。此の資本價値なるものは、毫も事實に存せざる單なる擬制である。若し此れが眞正の價値であるならば、此の價値なるものは、常に土地所有の收益に相當し、收益增せば增し、收益減ずれば減ず可き筈のものである。然るに實際は左樣でなく、收益に些の增減なくとも、唯だ利子率の騰落に從つて增減するのである。否とよ、利率が下れば收益減ずる場合に於ても、却つて土地の資本價値は騰り、其の反對に、收益は增しても、利率が上れば、地價は却つて下落するのである。土地所有の資本價値が、斯く變動することは國民全體に取つても、亦た其所有地を維持せんとする地主に取つても、何の利益をも齎らさないのである。是に依つて利益するものは、土地を賣放たんとする地主のみである。此種地主は、之によつて投機的利益を享くると、恰も取引所に於ける利益收得者と同樣なのである。又父の遺產相續に際して、土地以外の遺產相續を受くる者も、同樣な利益を得る、何となれば彼の相續分は利率下るときは、其價値を增すべきであるから。之れに反し、其所有地なり相續地なりを、依然として所有して居やうと思ふ者は、資本負債を增すことを餘儀なくせられることとなる。かくして農業進歩する程、土地の資本價値は騰り、從つて地主の負債は增進する一方あるのみとなるのである。即ち知る今日の法制が、土地を資本化することが土地負債增加の原因たることをと。

十九

ロドベルトスの此の論は、確かに一の誤解であり、速斷であることは、今更論ずるまでもない所である。乍去、農業を一の資本的企業と見る可からずとする其の根本思想は、決して誤れるものではない、否甚だ妥當な見解である。土地を單なる一の資本と見る見方、其樣の取扱方は、農業の特質を全然無視するものであつて、資本的企業ならざる農業を强て資本的企業の型に强制するてふ大矛盾に陷るものである（此點に於て私は、恩師ブレンタノ先生のロドベルトス評論に不遜ながら異存を表明せざるを得ないものである。ブ先生農政學一〇五頁以下）。那須教授も頃日『大阪每日』に連揭せしめられつゝある其の『公正なる小作料』論に於て、『農地價格に對する或利率を、其儘地代として徵收する主義は、小作料其もの、及びこれに從て農地價格其ものに變動を來しつゝある、又は來すこと

を必要なりとする場合に於ては、妥當なる小作料を決定すべき基準となり得ない』（十一月一日共(四)に於て）と云つて居られる。更らに又た教授は『斯く資本本位の見方も、勞働本位の見方も、共に現實の問題として、小作料に關する爭議を解決する力を持たぬものとすれば、吾人は此處に或意味に於いて兩者の妥協たる第三の立場に立つて、此問題の解決を圖らねばならぬ』として、地主、小作人双方の農業經營に關する支出負擔を別々に計算し、これに按分比例して收穫を分配するといふ案の採用を提唱して居られるのである。これを平易なる日本語に飜譯して云へば、地主對小作人の關係は資本主對勞働者の關係ではないと云ふ事にあるのであつて、其れは誠に正しい妥當にして穩健なる見方であるといふ外はない。地主も、小作人も共に農業經營に關しては、支出の負擔者であるのである。唯其の異る所は、小作人の負擔する費用中には、自己幷に家族の勞作てふ重要な課目が存すると云ふ一事である。然し其勞作は決て雇傭勞働者としての勞務給付ではない。換言すれば商工業勞働者の勞務給付とは、其經濟上幷に法律上の性質を全く異にするものである。而して小作人は勞作の支出のみならず物的支出をも負擔するものであり、更らに又、

た經營の危險をも負擔するものである。

二十

小作人は如何なる意味にても、工業勞働者に就て立てられた概念に於ての勞働者ではないと共に、又た普通受取られる意味に於いての企業者でもないのである。企業者對勞働者てふ概念區別は、我邦多數の小作農には全然適用出來ないことであり、又た適用す可きでない。其故は卽ち、我邦の農業は、市場支配の下に立つ一の營利經濟によつて營まれるものでないからである。此を企業者對勞働者の對立の明白なる工業や商業と比較するときは、其事情は甚だ複雜なることは當然である。其複雜性は、企業者對勞働者てふ辨別が立てられない一事に存するので、決して一人にして此の兩個の資格を兼備することから來るのではない。抑も其樣な辨別を許す可きほどに、我邦の農業は合則化、統一化、規則化せられて居ないから、事情は複雜なのである。然るに那須教授は云ふ、『加ふるに農民自身の複雜なる立場は農村問題の複雜化を更らに助長する。卽ち我邦の如き農村に

於ては、農民の大多數は企業者であると同時に、勞働者である。小作細農の如きは、何等企業的利潤を受くることなく（萬一其の生ずる場合には直ちに高められたる地代となりて吸收し去られる）其の得る所は極めて低廉なる勞働報酬に過ぎざるが故に、本質的には之を勞働者と目す可きであるが、併し法律的に觀察すれば、正さに企業者たるの形式を具へてゐる』と。企業者ならざるものが、企業利潤を受く可き理由は毛頭ない。又企業者といふことは、法律上の形式でも何んでもない、經濟的の實質である。我邦の法律には企業者などと云ふ形式とかを、其何れの處にも規定はして居ない。此は如何なる意味にでも法律上の問題ではないのである。抑も我邦の農民に就て、企業者對勞働者の區別を施さうとする者へ方其ものが、根本的に間違つて居るものである。恰も我邦の政黨に就て、レパブリカンとデモクラットの區別分けをしようとするようなものであつて、其れは初から問題とはならないのである。我邦農民は普通受取られた意味に於ての企業者でもなければ、勞働者でもない。從つて此兩資格を兼有することが農村問題の複雜化を助長するなどと云ふことは、元よりあり得可きことではない。農村問題の複雜性其ものゝ中に、我邦農民が企業者とも勞働者とも區別付け得られないと云ふことが、初から當然に含まれて居るのであつて、後から入り込み來つて、更らに複雜化を助長すると云ふのは、物の見方を誤つて居るものと信ずる。資本主義化せられない處其處には企業者對勞働者の對立は存しない。其れが複雜性其ものゝ本質なのである。教授は社會主義を罵つて、彼等が農業問題を論ずるときは、水を泳ぐ魚に陸を走らせんとする錯誤に陷ると言つて居られるが、教授自らの陷られた錯誤は、更らに水を泳ぐ魚に空中を飛行せしめんとするが如きものではあるまいか。

二十一

複雜性の問題は姑く右に止めて置くことゝし、次に教授が農村問題の中心點とせられるものに就て一瞥を加へて見よう。

教授は云ふ農村問題の內容の多岐に亘ること、又勞働問題の如く簡單に行かぬことは、以上論述せる所に依り、略々明であらう。さり乍ら幾多の關聯せる問題中、時により、社會

により、自ら中心となるべき若干の主要點を握み得ぬわけではない。かゝる中心點を握へないで居る事は、農村問題に對して、五里霧中の感をなさしむる所以であり、前掲社會政策學會に於ける如き質疑を發生せしむる所以である。然らば我が邦現下の農村問題を研究するに當りて、此の中心點は何處に存するかと。此れは如何にも同感であつて、社會政策學會に於ける質疑者の一人（最も大なる疑を懷いた一人）たりし私は、若干の主要點を握ましめて下さらうと云ふ教授の厚意に對して滿腔の感謝を捧げざるを得ない。ソコデ私は細密なる注意を以て、以下の文を熟讀した。然るに何事ぞ教授は『之を述ぶるに先つて、農村問題發生の經過に於て一瞥するを要する』と云はれ『農村問題の今昔』と云ふ一節を挿入して居られる。私は此一節を經過論として姑く措き、さて次の三節以下に向つたが、其處には、何が中心點であるかは一向示されて居ないのに失望せざるを得なかつた。教授の擧られて居るものは、經營規模の擴大と農村の工業化、農村計劃と植民政策、農村教育の新理想の三項目であるが、其何れが中心點であるかは少しも示されてないのである。教授は『此の解決は之を如何にするか、之は單なる小作問題の解決や、生産經營技術の改善位で片のつくものではない。經濟、法制、教育、社會生活等百般の方面より、統一的目的を追求して努力することによりて、始めて其の解決を期し得可きものである』と、再び其經過論の末尾に繰返して居られる。然らば其の追求す可き統一的目的とは何であるか、私共は切に之を知らんとするものである。其の統一的目的なるものが明示せられたなら、農村問題は其の混沌裡から救ひ出され得るに相違あるまいと思ふ。然るに教授は二度三度繰返して之を與ふ可きことを示唆し置かれながら、終に何等之れを示すことなくして終られて居るのである。

二十二

經營規模の擴大は誠に結構なことである。私は社會政策學會に於てアーサー・ヤングの大農論を紹介して、我邦農業の過小經營の弊を痛論し、主として横井博士の農村論に對立せしむることを勉めたのは、今より余程以前のことである。確か其同じ折に於て高岡博士も我邦過小農の弊を極めて周密該博な統計的材料に基て詳論せられたと記憶して

居る。那須教授の論も其當時よりして引續き同樣であることは私共の甚だ意を强くする所である。

農村の工業化に就ては、近頃大河内正敏博士の剴切な意見書の惠送を受け甚多くの暗示を得た。農村計劃と植民政策のことは、私は教授及多くの同論者と其見る所を異にする。農村教育のことは誠に結構千萬なことである。

斯く教授の擧げられた處は、大抵結構づくめの事柄を以て滿されて居つて、其れが實行出來るなら此上ないことは疑を容れない。其れと共に其れは何も農村問題の喧しくなつた今に於て然るのでなく、久しい以前から結構千萬な事として普く知られて居り、而して可なり多數の人々によつて耳にタコの入る程論ぜられて居た事柄である。或は云ふ人あらん『眞理は平凡なりと雖も猶ほ眞理なり』と。私はそれに答へて言ひたい『平凡は眞理なりと雖も猶平凡なり』と。

教授は我國農村問題の解決は、單なる小作問題の解決や、生産及經營技術の改善位で片つくものではない、經濟、法制、教育、社會生活の百般の方面より統一的目的を追求して努力することによりて、始めて其の解決を期し得可きものであると云はれ、而して余は我が國農村問題の解決の爲めに、一農業經營規模の擴張、二農村に工業を興すこと、三國內及海外移植民の三點を實行するを以て最も緊要事と認むるものである、而して之が前提としては各農村に於て　四農村計劃を建つることが必要であると云つて居られる。然らば農村計劃を立つることが、所謂統一的目的であるとせらるゝのか又は　五國家が此間に善處して、都會偏重の弊を矯むることを以て、其れなりとせらるゝのか教授の其後の所論中には教授の眞意を推定す可き便が一も與へられてないのである。

二十三

論じて茲に到り、私は端なく、レニンが其の『十九世紀末に於ける露國の農業問題』の終りに絶叫した次の一句を憶出さゞるを得ない。曰く『之を要するに、農業問題と農業恐慌の本體は、農業の振興を妨害する一切の事柄を廢止すると云ふことには存しない。此等の妨害を如何にして廢止するかの方法、如何なる階級によつて、又た如何なる方法を用

ねて、此の廢止を實行するかに存する。國の生產力の發達を妨害する事情を廢止すると云ふことは之を辭し得ない。而して其れは主觀的意味のみでなく、客觀的意味に於て然るのである。換言すれば、其の廢止は不可避的であつて、如何なる權力と雖も之を抑止することは出來ないのである』と。（一九二〇刊　伯林版七五頁）

私は教授に問ひ度い。教授の主張せられる一切の結構づくめの事柄は、如何なる階級の手によつて、而して其れは何の手段によつて、而して如何なる道行を經て實行せらる可きであるか、實行せらる可き見込があるのであるかと。私は之れが農村問題の中核であると信すること、レニンと全く同樣である。此れが教へられるにあらざれば、我々の努力を總導す可き統一的目的なるものは與へられる見込はないと、私は確信して居るのである。

我邦農業經營の規模過小なることが、農業生產能率の增進を著しく妨害して居ることは萬人須知の一事實である。從つて規模の擴大化が能率、生產力引上げに多大の効ある可きことは、一切の討論を超越して居る。教授も私も此點に於ては全く同一見解を有つものである。從つて其を希ふことに於て、私は決して教授の後に落つるものではない。唯だ問題は、如何にして其れが實行せられ得るか、如何なる方法手段によつて、而して誰が當面の實行者となつて其れを實行し得るか　一事に存する。唯希しいと云つた丈けでは、何の解決にもならない。如何して實行するかを示して初めて解決が望み得られるのである。然らざる限り、其は單なる願望、露骨に云へば一片の机上の空論たるの外はあるまい。農村の工業化にしても亦然りである。

二十四

那須教授は云ふ、余は農村問題の解決に關する卑見の概要を述べた。然かも此等の方策の實行は、畢竟するに農民自身の覺醒に俟たざるを得ない。人間の改良が凡の改良案の出發點にして又到着點なりと云ふ古くして、而も常に新らしい眞理に吾人は再び逢着する。……此所に於てか農民の教化を高め自覺を促す可き農村教育の問題は我等の最後に一考せざる可からざるものとなると。此れに依て見ると教授は農民の自覺てふ一

事に一切の解決の鎖鑰を求め、而して其れは農村教育の振興によつて實現せらるとせらるゝが如くである。此れは conclusion in which nothing is concluded（何事も終結せざる結論）である。恰かも今日　人間が根本的に改造せらるゝとき、初めて社會問題は解決せらると云ふと同じである。人間の教育は農村問題や社會問題を超越した重大事である。一部の問題の手段たる可きものではない。其れは姑く措くとして、農村教育を施すこと何十年にして、而して其普及の程度が如何程になると、農村問題が解決せられるのであるか。此は空をつかむような話である。私は繰返して云ひたい『平凡は眞理なりと雖も猶平凡なり』と。

我邦農業經營　規模の小なること、農家副業の發達せざること、殊に牧畜の發達して居るざること、副業的工業の殆んど皆無なること、農村計劃のなかりしこと等は昔から我邦の農業の發達を妨げて居た原因である。農村問題の起つた今日忽如として起つて來た事柄ではない。其等の妨害事情の取り去らるゝことは、農村問題の起る起らざるに頓着なく、必ず希はなければならないことである。而して農村問題の起つたには、此等の事情の存することが最大の原因たることも亦一の疑を容れない。然し何故に此等の原因から農村問題が起つたのであるかに就ては、私は教授と全く其見方を異にするものである。何となれば、教授は此等の原因が一向取去られそうもないから農村問題が起つたと見て居られるやうであるが、私を以て見れば、農村問題の起つたのは此等の原因が多少なりとも取去られる見込が付いて來たから、而して其れを取去るに付ては、先づ農村問題を起すことが其不可避的の道行であるから、農村問題が起つて來たと思ふのであるから。例を以て云へば、不消化物を喫して胃を害した人が終に下痢に惱むことゝなつた。那須教授曰く、下痢を止めることが必要である、其れには胃病を直さねばならぬと。私は曰く胃病を直すことが肝要である、幸に下痢が起つたために胃病と云ふことが分つた、胃病さへ直せば、下痢は自然に直るであらうと。即ち私は前にも云つた、農村問題の起つたことは寧ろ幸なことであると。農村問題の勃興は、我邦の農業の根本的病弊治療上の一道行である、一手段である。其れが起らなかつたなら我々は今猶依然として根本病弊のあるに十分氣が付かなかつたであらう。

二十五

換言すれば、農村問題の起つたこと其事は病ではない、否却つて病の治療を促進する一手段である。而も今日の狀態では其最も有力有効な手段である。我々は農村問題の勃興を見て、大いに望を與へられたのである。斯く問題の起るは、卽ち根本病弊の除却に、一歩は一歩と我々をして近付かしめて呉れる所以である。根本的解決の鍵は、實に此農村問題の勃興其事を措いて外にない。教育の振興でもない、都會偏重の弊を矯むることでもない、況んや內外移殖民による農村人口の稀薄化でもない。農村問題の聲が愈々高りゝ小作爭議が愈々續發することは、恰かも胃病患者の下痢に於ける如く、苦痛には相違ないが、其れが結局根本の病を取去る可き唯一の道行である。我々が正さに解決せざる可からざることは、農村問題其ものではない。農村問題を產み出した我邦農業の根本的病弊是れである。徒らに下り止め藥を投ずるは眞に病を療す道ではない。唯當面の農村問題の處理に屈託するは、我邦農業と農民とを眞に救ひ出す所以ではないのである。農村問題を根本的に解決するものは、獨り農村問題其れ自らである。農村問題が鎭壓し去らるゝとき、農村問題は却つて濃化するの外はないのである。我々は農村問題を鎭壓することなく、其れをして其行く所まで行かしめることによつてのみ、農村問題は眞に徹底的に解決し得られるのである。

此意味からしても、私は那須教授其他多くの農政論者の唱へらるゝ移殖民論殊に海外移殖民論に極力反對せざるを得ないものである。海外移殖民によつて農村人口を稀薄ならしめ得可しとするは、人口學上餘りに幼稚なる考へ方であることは、私は日米問題發生の當初から之を主張して居るが、其事は今論ぜずとして、假りに海外移殖民によつて、一時丈けは農村人口を稀薄化し得るとしても、其れは決して問題の解決とはならない、唯問題の遲延となるのみである。前例を藉りれば、下痢狀態を徒らに延長して、病者の苦しみと其病とを長引かしむるのみである。何となれば、農村人口の稀薄化は、決して教授等の望まれる通りの經營の擴大を直ちに喚起す力は寸毫も有つて居らぬものである。經營の擴張は其樣な事では中々實現せられるものではない。況んや農村の工業化をや。

F. VI, 143.

況んや農村計劃の樹立をや。其狀は、イクラ移殖民を奬勵しても、都會に於ける失業者の跡を絶ち得ないと同樣であらう。移殖民は社會問題の解決に殆んど何の資する所なきが如く、否其れよりも更らにより多く農村問題の解決に裨益する所ないものと私は確信する（此點は他日或は再論するであらう、今は簡單に卑見を陳ぶるに止めて置く）。

二十六

西洋殊に獨逸にあつては、農耕地の所有主の負債の過大なることが農業問題の最重要點である。我邦に於ては此點に關して精確なる調査あるを聞かぬが、高岡博士が嘗て社會政策學會に於て報告せられた處によると、我農民の負債額は獨逸に於ける如く過重なものではないようである（河田博士の『農業經濟學』は千頁に近い大著であるにも拘らず、此點に就ては別に詳しい調査の跡を發見することが出來ない。總じて河田博士の農業論は我邦の實狀に關する實證的調査を輕視して居られるようである。此點に於ては高岡博士の『農政研究』は綿密なる實情調査を滿載して居て、我々門外漢を益すること莫大である）。兎に角我農政の最大問題の一は經營規模の過小、其れより來る生産能率の微小なること是れであらう。少くとも私は茲に最重大の禍根を認む可しと考へつゝあるものである。而して其擴張に付いては、色々な方法があらう、工夫せらる可き施設は千差萬別であらう。而も其の方法も其の施設も一つの大きな動機があつて、之を鞭韃するにあらざれば、十分に其功を奏せざる可きを思ふものである。而して其の大きな動機なるものこそ、攝て一切の妨害を取去り、一切の希はしい改善を可能ならしめるものでなければならぬと私は思ふものである。

其大きな動機は、今や農村問題の勃興と云ふ形態に於いて段々と動き出して居るものと私は見る。是れ私が農村問題の勃興寧ろ喜ぶ可しと言ふ所以である。而して又私が農村問題の發祥地は之を農村に求む可からず、其以外の廣い天地に之を求めなければならぬと言ふ所以である。然らば其大きな動機とは何であるか。答へて曰く、資本主義營利經濟の擴張普及それである。

二十七

我邦農業經營の規模小であり、從つて其生産能率甚だ低く、農家に副業盛ならず、工業化などは迚も問題たらざりし昔に在つて、農村問題の起らなかつたのは、我農民の欲望小に、生きずさりとて死なぬ程度の生活に壓抑せられても、大した不平を起すことなく殆んど醉生夢死して居たからである。而して此を刺激す可き都會の資本主義は未だ起らなかつたからである。故に其小規模農業は甚利益薄いものであり、國として甚希はしからざるものであつたに相違ないにも拘らず、數百年間殆んど其狀態を改めることなくして、終に今日まで存續し來つたのである。此狀態からの脫出は、他の何の工夫施設によつても、決して十分に行はれ得るものでない。唯一つ資本主義、營利主義の農村への侵染によつてのみ其れは行はれ得るのである。即ち農業が一の資本的企業となり、農耕地が一の資本となることによつてのみ、有力有効なる脫出の刺激が與へられ、農業經營規模の擴大が實現せられ得るのであつて、農村人口の稀薄化などによつては到底十分に行はれ得る見込はないのである。

我邦の資本主義は未だ新しいものである。然し其れは近年長足の進歩をなし、近來に至つて資本主義的心理は、段々農村にも入り込むやうになつた。換言すれば河田博士の言はれると反對に、我農民心理は段々一般の資本的社會と反りが合ふやうになつて來た。茲に於て農民は簿記的に少なくとも多少計算的に其經濟を顧みるようにならざるを得なくなつた、多少なりとも計算的に其經濟狀態を考慮する時、彼等は爭で從來の地主對小作人の狀態に、從來の農村生活に滿足する事が出來よう。小作爭議、農村問題の勃發は其當然の產物である。殊に神戸博士の說法あるにも拘らず、自足自給の經濟狀態から脫出す可く始めた農民は、其生活上に非常な不安と不平とを感ずるに至るは當然である。然るを無理に自足自給の死なず生きざる昔に返れと說法するのは、產れ出でつゝある嬰兒に母胎へ返れと命ずるやうな無理である。

資本主義化するといふことは、我國農民にとつて今や唯一の解脫の道であるのである。外に脫け道は一本もないのである。事の善惡是非の問題ではない、事物自然の進行即ち

斯くの如くなのである。我々は此大勢力を在るが儘に受取つて唯其間に起る可き無用の苦しみ、無用の弊害を可能的に防止するの外はない。此大勢に逆行すると云ふことは全然問題とならないのである。

而して混沌たる農村問題の單純化の道は、この大事實を事實有るが儘に認めることの外はないのである。

此事實を無視し閑却して、複雜なる農村問題に當面するときは、複雜なる問題を更らに其の誤れる取り扱ひ方によりてより複雜たらしめることとなる外はない。那須河田兩博士の農村問題論の複雜性は斯くして說明し得られると信ずる。

二十八

私は此の論文に於ては、今日の農村問題論の如何に混沌たるものなるかを指摘して、其單純化の唯一の可能の道と信ずることを示せば以て足れりとするものであるから、茲で筆を擱いて然るべきことと思ふが、事の序であるから、最終に一言自分の未熟極る考へを開陳する許を乞いたいと思ふ。

農村論の單純化は、資本主義のアドヴェントの儼然なる事實を確認する外に道なきが如く、農村問題そのものゝ單純化も資本主義に『オリエンチーレン』することによつてのみ望み得ると私は信ずるものである。換言すれば農村と農民とが益々、より多く市場化し市場の支配を受くることになれば、市場は其劃一性、其合則性を以て農村と農民とに臨み、必らず其經濟生活の態樣を合理化し、統一化するに相違ない。かくして那須教授が其の『公正なる小作料』論に於て試みられた樣な、計算的にして合理的なる複式簿記本位の經濟法が實現し得られるであらうし、企業者にも勞働者にもあらざる農民は明かに企業者か勞働者かに分別せられ其處に階級の對立が生じ、階級鬪爭が出現することになるであらう。而してそれ「經濟規模の擴大化、農村工業の樹立、農村計劃の確立をも伴ふであらう。乍去、人或は其れは問題の轉置に過ぎぬといふであらう。然り正さに其通りである。今日の農村問題は消滅するであらうと共に、新しい農村問題が必ず起る。即ち農村に於ける階級鬪爭の社會問題が其れである。

茲に一つ考へ得ることは、農耕地の國有實行（米穀の國家專賣と混同す可からず）是れである。農耕地を凡て國有とし今日の地主階級なるものを全廢すれば、農村が資本主義に『オリエンチーレン』しても、階級鬪爭は起らなくて濟むであらうと云ふ論者がある。たしか河田博士は久しい以前からの土地國有論者であるようである。殊に此頃重刷された博士の舊著『土地經濟論』は甚有力なる土地國有論を主張したものだと記憶して居る。私は此論に對して簡單に答へて置きたい。土地の國有は決して資本主義の農村への侵染を妨ぐる効はない。唯其の形態を渝へるのみで依然として資本主義は強く（恐らくより多く）其魔術を逞くする。階級鬪爭は其形態を變ずるに相違ない、決して消滅することは望まれない。レニン云ふ『土地に對する私有權の全廢は市場的並に資本的にオリエンチーレンされた農業の根柢たるブルヂオア主義的基調を一も變ずるものではない。土地の國有が社會主義又は土地均分制と同じものなりと思惟する位間違つた考へ方はない』と。

誠にレニンの言ふ樣に農産物の換價が市場を前提とする以上、農民は今日の價格經濟流通經濟の支配を脱することは出來るものでない（私はマルクス從てレニンと反對に絞り取りは主として流通生活に於て行はると信ずるものであるから、猶更以て絞り取り經濟の支配を見る、地主の絞り取りは已むとしても、都會商人の農民絞り取りが之れに代つて起ると見るものである）。農業と農民の資本主義經濟への入り込みとは、其生産する農産物が市場に於いて換價せられると云ふことを前提することは言ふまでもない。而して又た同時に國有の土地に對する支拂は、今日の價格經濟の原則に準據することを辭し能はないものである（從つて茲にも絞り取りは行はれる）。否、其れあるからこそ農民の經濟は今日と異つた合理化（ゾムバルトの所謂合理的にして計算的）規則化を見得るのである。レニン故に云ふ『商品市場なるもの存在する限り、社會主義を云々するは笑ふ可きことである』と。絞り取りを生産上にのみ認めるレニンすら斯く言ふ。況んや其主たる舞台を流通上に認める私から見れば猶更のことである。農産物を貨幣に換價する市場、其貨幣を以て農具肥料を買ふ市場の作用は、土地所有の形態が私有であらうと國有であらうと毫も異る所なしと彼が言つたのは、彼が意味したよりも遙かにより強く

向後の我邦農村に就て言はれなければならないと思ふ。併し私は今土地國有論を評論して居るのではない。唯だ現今の農村問題論の混沌たる有樣を開陳して、之れに對して限りなき頭惱の紛亂に惱みつゝあるものなることを明かにすれば事足りるのである。

（十三、十一、七）

此文病中の執筆にかゝり、論旨の蕪雜なるは勿論、畏敬せる諸先輩に對し禮を失することと甚し。切に寬恕を祈る。

＝大正十三年十一・十二月『改造』掲載＝

5. XI. 26. -1